

氏名	よ だ よし まる 依 田 義 丸
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 304 号
学位授与の日付	平 成 8 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	『タイタス・アンドロニカス』研究

論文調査委員 (主査) 教授 喜志哲雄 教授 豊田昌倫 教授 中村絃一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、シェイクスピアの最初の悲劇『タイタス・アンドロニカス』をもっぱら劇作術に即して研究したものである。全体は序文、5章に分けられた本論、そして結論からなる。

序文において論者は、この劇が文学作品としては必ずしも高い評価を受けて来なかったにもかかわらず、上演されるものとしては人気があったという事実に着目し、この作品で用いられている劇作術を手がかりにしてこの事実を解明しようとする。その場合、論者が特に注目するのは、作品の材源をシェイクスピアがどう処理したか、とりわけ材源をどう改変したか、あるいは材源に含まれていない挿話や設定をどう採り入れたかといった問題である。

こういう視点に立って、論者は5章からなる本論において作品の綿密な分析を試みる。五つの章はそれぞれ戯曲の第一幕から第五幕までを扱い、基本的には劇の進行を追いながら劇作術の特徴を探るという方法が用いられるのであるが、論者は終始一貫、上演されたものとしてのこの作品が劇場の観客に及ぼす効果を念頭において論を運ぶ。『タイタス・アンドロニカス』とは、ローマの武将タイタスによるゴート人の征服、ゴート人の女王タモーラによるアンドロニカス一族へのさまざまなかたちの復讐、そして、タモーラと彼女の愛人で彼女の悪行に協力する黒人エアロンとに対する、タイタスの最終的な復讐を描く劇であり、主人公であるタイタスは観客の共感を誘う人物、悪人であるタモーラやエアロンは観客の反撥を買う人物と一応は言えるのであるが、作者の巧妙な操作によって人物たちに対する観客の反応は甚だ複雑なものになることを論者は指摘する。

すなわち第一章では、ローマの帝位の継承権をめぐる先帝の二人の息子が争うという、材源にはない事件をシェイクスピアが採り入れていることに、論者は注目する。この事件に対するタイタスの処置には必ずしも適切とは言えぬ点があり、それによって観客は彼に対して距離をおくようになるというのである。他方、タイタスはタモーラの懇願にもかかわらず彼女の息子を殺害するが、この結果、観客は、本来は悪人であるこの女性にある程度の同情を抱くようになると、論者は述べる。

続く第二章では、観客は第一幕を見て、タモーラがタイタスに対する復讐の計画を実行に移すことを期

待するに違いないのに、実際にはこの期待は裏切られると、論者は言う。タモーラによって行われるべき復讐は、彼女自身ではなくて彼女の愛人エアロンによって代行されるからである。そしてエアロンには、《ヴァイス》という中世劇以来の人物の型に従ったところがあり、また、あたかも劇作家のように劇の状況の全体を統御する面があるので、結局において、観客は彼の悪行に対して単純に反撥することはないというのが、論者の主張するところである。その上、タイタスとタモーラとの対立と同時に、タイタスとエアロンとの対立も扱われているので、観客の注意が拡散し、多面的な反応を示すこととなる。第二幕には、タモーラの二人の息子がタイタスの娘ラヴィニアを強姦し、ことの露見を防ぐために彼女の両手と舌を切るとか、ラヴィニアの夫を殺害して罪をタイタスの息子たちに着せるとかといった衝撃的な事件が現われるが、これらに関しても、観客が犠牲者たちに単純に同情しないように作者は工夫を凝らしていると、論者は断ずる。

第三章では、タイタスの復讐が実行に移されようとするかに見えて、かえって齟齬を来す次第が分析される。タイタスは、無実の罪を着せられた息子たちを救うために自分の片手を切取って差出すが、現実にはエアロンたちの奸計にはまる結果となり、息子たちは処刑されてしまう。それに、ラヴィニアを辱めたのがタモーラの息子たちであるという、既に観客には明らかになっている事実を、タイタスはまだ知るに至っていない。従って、タイタスは悲惨極まる状況におかれていながら、その悲惨さの実態を明確には認識しておらず、自らの悲惨さを嘆く彼の言葉は明瞭な対象をもちえない。つまり、現実と言語表現とが必ずしも見合ったものになっていないので、観客の語り手タイタスへの感情移入が成立しにくいということになる。

第四章では、ラヴィニアを辱めた犯人をタイタスが知る次第が考察される。ここでは、オウィディウスの『変身物語』への言及やラテン語の頻出といった手法が、事件に様式性を与え、現実感を稀薄にしていると、論者は説く。また、エアロンがタモーラとの間にもうけた子供に愛情を注ぐという挿話が、彼に対する観客の反撥をやわらげているとも、論者は主張する。いずれにせよ、人物たちに対する観客の反応は決して一面的ではないというのが、論者の最も強調するところである。

第五章では、この劇のもつメタシアター風の構造が分析される。タモーラの二人の息子がそれぞれ《強姦》と《殺人》という、道徳劇の登場人物を思わせる存在に扮してタイタスを訪れる場面を、論者は一種の劇中劇と捉える。タイタスは二人を殺害し、やがて二人の肉で作った料理をタモーラに食わせるのだが、このように、決定的な復讐行為が劇中劇の延長として行われること、従って現実感が何ほどこ稀薄になっていることに、論者はこの劇の特色を認める。しかも、タイタスはエアロンが悪の張本人であることを知らぬままに死ぬのであり、観客は最後まで彼に対する距離を埋めることができないと、論者は述べる。

作者は観客が人物に対して終始一定の距離を保つように仕組んでおり、観客の反応を微妙に操作している。それがこの作品における劇作術の際立った点であるというのが、論者の結論である。

論文審査の結果の要旨

シェイクスピアの最初の悲劇『タイタス・アンドロニカス』は、おそらくは残酷な内容のせいで従来必ずしも高い評価を受けて来なかった。この作品を論じる人の多くは、そこに認められる劇作術は荒削りで

欠点が目立つとする。本論文はこの劇についてのわが国では初めての本格的な研究であり、この戯曲を単独に扱った研究書は英語圏においても僅か二三に過ぎないという事情を考慮すると、極めて貴重な成果であると言わねばならない。しかも論者は、これまでの研究者がこの作品の欠点と見なしていたものこそ、この作品の本当の面白さなのであり、そこにはシェイクスピアの細心の工夫の痕が認められると主張する。この主張が論者の採り上げるあらゆる場合に当てはまるかどうかについては、議論の余地があるであろうが、少なくともそれが興味ある指摘であり、今後の研究者が無視できないものを含んでいることは否定できない。

論者はまずシェイクスピアがこの劇の材源として用いたと推定される物語と劇そのものとを比較し、材源にどのような改変が加えられているか、材源に含まれていないどのような挿話や設定が採り入れられているかを、綿密に考察する。その結果、これらの工夫は、観客が主要な劇中人物のいずれに対しても全面的な共感や反撥を抱かないように仕向けるためのものであることが明らかになると、論者は言う。ゴート人を征服したローマの武将タイタスは善人、ゴート人の女王タモーラや彼女の愛人で彼女に協力するエアロンは悪人と一応は言えるが、事実はそれほど単純ではないことを示す論者の分析には、極めて説得力がある。

この作品には衝撃的な事件が数多く現われるが、その中でも際立っているのは、タモーラの二人の息子がタイタスの娘ラヴィニアを強姦し、ことの露見を防ぐために彼女の両手と舌を切取るというものである。これに先だって、二人の息子はラヴィニアの夫を殺害し、タイタスの息子たちに罪を着せる。当然のこととしてタイタスは嘆くが、彼には、ラヴィニアを辱めた者が、あるいはラヴィニアの夫を殺した者が、本当は誰であるのかという、観客には既に明らかになっていることが、最初は分からない。言換えれば、タイタスは自らが悲惨な状況におかれていることは知っていても、その悲惨さの実態を十分に認識しているとは言えないのであり、結果として、彼の嘆きの言葉とそれが描写しようとする現実との間には不釣り合いが生じていると、論者は指摘する。そして、それによって観客はタイタスの嘆きを一定の距離をおいて受取ることになるというのである。これは『タイタス・アンドロニカス』という戯曲の修辞の特徴にかかわる重要な指摘であると言えよう。

劇の大詰で、タモーラの二人の息子は<強姦>と<殺人>という、中世の道德劇の登場人物を思わせる存在に扮してタイタスを訪れる。タイタスは二人が演じる芝居をそのまま受け入れ、やがて二人を殺して、その肉で作った料理をタモーラに食わせる。つまり、最終的な復讐は一種の劇中劇として行われるのであり、そこには現実感が欠けていると、論者は述べる。これまた注目すべき議論である。

その他、論者が本文に即して行う分析には興味深いものが甚だ多いが、論文全体として問題がないわけではない。たとえば、この劇が視覚的に強い印象を与える場面のみちており、従って文学作品として読まれるよりも上演された時の方が効果を発揮するという論者の主張は、大筋においては正しいであろうが、この点について論じるためには、戯曲の読者と劇の観客という受容者のふたつのあり方の違いを、もっと理論的に吟味する必要がある。また、作者がしばしば劇の事件を様式化し、それによって事件の現実感が稀薄になっているという指摘も、基本的には正しいが、そのことが劇の事件と観客との間に距離を生じさせると直ちに断定するのは性急に過ぎる。劇のリアリティという問題はまことに複雑であり、ある事件が

虚構であることが強調されているが故にかえって迫力をもつという場合も充分にありうるからだ。総じて本論文は、基礎となるべき理論の構築において不十分と言わざるをえないが、他方、作品の細部の分析はこれ以上を望むべくもないほど精緻を極めており、上に指摘した欠点を補って余りあるものと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1996年5月31日、調査委員3名が試験を行った結果、合格と認めた。